

「トイレと鉛と化粧の話」

東京大学のキャンパスは、江戸時代最大の大名加賀前田家の江戸屋敷跡である。かつて発掘調査が行われ、三つの厠跡が発見された。トイレの跡である。それぞれ離れた所にあったのだが、そのうち二つは女性が使用したもの、残りの一つは男性が使用したものと判断された。その根拠となったのは土に含まれていた鉛の量だった。女性用と判断されたトイレ跡の土には、もう一つのトイレ跡の五～六倍の鉛が含まれていたのだ。何故鉛が多いことが女性用の根拠となるのか。それは当時の白粉に秘密がある。当時の白粉は炭酸鉛（鉛白ともよばれる）を原料としていた。白粉には植物性のものもあったが、鉛白粉は「のりが良い」ということで多く使われていたらしい。つまり、女性は毎日鉛を顔に塗っていたということになる。皮膚から吸収された鉛成分の一部が、排泄されてトイレの底に沈殿したのである。

ところで、江戸時代の大名と農民の平均寿命を比較した資料がある。ある大名家七代一二〇人の平均死亡年齢を調べたところ、何と男子で二二．〇歳、女子で一五．三歳だったそうである。一七世紀後半から一九世紀後半の約二〇〇年間にあたるが、ほぼ同時期の農民のそれは、男子四二．七歳、女子四四．〇歳だということから大名家の人々はおそろしく短命だったということになる。衣食住に不自由せず、医療的にも条件の良いはずの大名家が、何故農民の半分しか生きられなかったのだろうか。にわかには信じられないような数字だが、この原因も前記の白粉にあったのだという。

鉛成分を含んだ白粉を塗り続けると地肌は黒ずんでくる。これを白粉焼けというが、それを隠すためにさらに厚く塗るという悪循環が繰り返される。皮膚から吸収された鉛はすべてが排泄されることはなく体内に蓄積される。その結果鉛中毒になる女性が多かった。

鉛中毒は神経麻痺、脳炎、貧血などの症状を引き起こす。さらに母体から胎児に影響を及ぼすから、先天的に鉛害の影響をもった子どもが生まれる。化粧をしない男子も無縁ではない。これが何代も重ねられ拡大再生産される。その結果、大名家では死産や幼くして命を落とす子どもが非常に多かったということだ。一方農民は日常的に化粧をすることなどなかったから、鉛害とは無縁である。こちらは女性の方が長生きだ。「美人薄命」ではなく「化粧薄命」だったわけだ。

何でもちょっと興味をもって勉強すれば面白いことが色々発見できる。当たり前だと思っていたことが覆されることもしばしばある。新しい発見があれば新しい疑問が生まれ、もっと調べてみたいという気にもなる。それが人間を豊

かにしていく。アンテナを高く広く張り巡らせて、知的好奇心を旺盛に発揮してほしいと思う。高校時代は、それができる時なのである。